

色眼鏡



今出川キャンパスの一角に「新島遺品庫」という、学生も教職員もほとんど立ち入らない建物がある。その名の通り、新島襄の遺品をはじめ、新島家の旧蔵資料や同志社の草創期の学校史を物語る資料が収められている収蔵庫である。大きさは80㎡ほどと広くはないが、ヴォーリズ建築事務所（1941年に一柳建築事務所と改称）の設計により、1942年に竣工した。かつては遺品庫の中に収蔵スペースと展示スペースもあったが、収蔵スペースが狭隘化したことから、2000年の内装改築により、収蔵スペースのみとなった。

遺品庫収蔵資料は、いわば同志社にとって「文化財」級の資料である。筆まめといわれた新島直筆の書簡類、そして実際に使用していた日用品も多数保存されている。彼が実際に書き残した、触った資料を目の前にすると、本の中の「新島襄」が突然生き生きとした存在として感じられるようになる。ノートや書類の隅

の走り書きや、テーブルクロスの染み、本の落書きなど、一人の人間としての新島襄を身近に感じることができるのである。

そのような資料の中から一つを選ぶのは難しい。新島に思いを馳せる人それぞれにとっても逸品は異なるだろう。一方で、新島の遺品、なかでも立体物の類は、その物への書付や日記などの記録がない限り、由来が分からない。見栄えはするのに説明ができないというジレンマを抱えることにはなるのだが、同時にその資料にまつわる新島のエピソードについて自由な想像を掻き立てられるのである。

今回紹介する「色眼鏡」も資料についての情報量は多くない。附属のケースに擦れ気味の新島の自著「Joseph Neesima' Phillips Academy」とあることから、フィリッブス・アカデミー在学中（1865～67年）に入手したものと考えられる。新島は、ボストンから離れたアンドーヴァーで、寮ではなくヒドウン家にホームステイしながら通学した。新島にとって、アメリカで最初の学生生活であり、下宿先のヒドウン姉弟、同じ下宿人のフリント夫妻など現地の人たちとの生活を通して、新しい文化へ適応し始めた最初の生活がこのアンドーヴァーの地だったのである。この頃、新島は眼病に悩まされていたの

だが、東海岸の眩しい日差しを避けるために、色眼鏡が必要であつたのだろうか。

驚くのは色眼鏡の小ささである。オーバル型の濃いグレーのレンズが嵌まったフレームの横幅はわずか11cm、つるの長さ12cm。1868年6月のメモでは、新島の身長は5フィート5インチ半（約164cm）、体重は123ポンド（約55・7kg）とあり、新島の身体的な大きさを推測できるが、実際にこの小さな色眼鏡から、新島襄その人の身体サイズを、奥行きをもって感じることができるのである。

（同志社社史資料センター 布施智子）